哲學研究　第九十八號

實在に就て

久松眞一

星が出ないと星は見えぬとか、眼をつむると星は見えぬとかいふことは、星そのものの分析によるもので第二次的の思惟の分別である。嚴密にいふと見えぬものを星といふことはできぬ。吾々が眼をつむつて居ても星は依然として存在するといふことは妥當でない。又星はなくとも眼は依然存在するといふことも同じく妥當ではない。これは主客の分離である。分離によつて具体的實在から遠ざかつて空想的のものに墮して行くのである。眞の實在に於ては星と眼とは同一物である。眼を星といふこともでき、星を眼といふこともできる。星が眼を見るといふこともできるし、眼が星を見るといふこともできる。

眞の眼は固定したものではない。或は星となり、或は松となる、或は火となり、或は水となる。吾々が常識で眼と稱するものは眞の眼ではない。吾々がこれは眼であるとして固定したときには、それはもはや眞の眼ではない。それであるから「この眼

で星を見る」といふ場合には「この眼で」といふ瞬間に於いて既に星は實在ではない。この場合の實在は肉体的の眼である。かゝる眼はすでに對象となつて居る眼であつて眞の眼ではない。即ち作用としての眼ではない。かゝる眼は星を見ることはできぬ。この場合には星も實在ではなく、眼も眞の眼ではない。隨つて、この命題は眞の意味に於ては空想である。星は眞の眼によつて始めて見らるるのである。しかし、星と眼とは別物ではないから、星と眼とを分ちて「眞の眼によつて星を見る」といふのも當らぬのである。事實は唯、星といふだけである。星があるといふことゝ星を見るといふことゝは同じことである。前者はかりに客觀的の言ひ表はし方をとり、後者はかりに主觀的の言ひ表はし方をとりたるまでゞある。常識はこの言語に誤らるることが多いのである。言語に欺かれず、虚心にすればこの主觀と客觀との統一は完全に意識し得るのである。かく見ると在るとは同意義であるから、星を見て居る時には星のみありて他物はないのである。しかし、星より月に移る時には星はすでにないのである。星は實在ではない。星は一點の根跡をも止めない。盡大地月のみあつて他あることないのである。更に嚴密にいへば他といふ意識もないのである。すでに月のみありて他なしと意識せば月はすでに實在しない。かくて

固定した實在はない。實在とは主客合一のところを指していふのである。このところに於ては主客合一といふもすでに中らぬのである。故に、星實在する時、眼實在せず、眼實在する時、星實在せず、星と眼とは同時に存在することはできぬ。星を見るものは眼を見ず。前にものべし如く、見る眞の眼は生理的の眼ではない。この事は生理學者、心理學者と雖も否定することのできない事實である。眞に見る主體は、味はふ主體、聞く主體、觸れる主體、嗅ぐ主體、或は歩く主體と何等異りたるものではない。皆同一物である。この主體はいはゞ普遍唯一の絶對である。このものは佛敎の所謂、一心である。この一心には何等の障碍もない。何物にも拘束されるところない。その內に何ものをも藏しない。これは動ではない、動の主體であるからである。記憶を存せぬ、記憶する主體であるからである。もし記憶をその內に存するならば忘れる主體となることはできぬ。或は記憶し、或は忘るゝ主體である。それ故、この主體は一切の形相を絶したものである。過去の何ものにも染汚せられぬ眞の無一物である。ベルグソンなどのいふ如き一切の過去を包括する持續ではない。記憶といふ作用の主體ではあるが記憶の蓄藏所ではない。又、生死の主體であつて生死ではない。生ずるものであり、死するものである。生死といふことは畢竟この絶對者

の一の經驗にすぎない。かくの如く、一切の作用もしくは、一切のものゝ主体である。しかし、これを主體と稱するのはかりに便宜上名けたるに過ぎずして決して無内容なる空虛なるものではない。又、抽象的のものではない。何とならば、さきにも述べた如く客觀から離すことのできぬものであるからである。例へば、見る主體であるといふ場合に、それは見らるゝものと別なものではない。星ならば星自體であるからである。星の外に主體はないのである。心理學者のいふ如き肉體中にある自我意識ではない。却つて自我意識の主體である。自我意識はこの主體によつて始めて成立するのである。それ故、主體は定まれるところに位置づけることはできぬ。常に自由である。神出鬼沒である。一切のものに拘束されぬから因果に拘束さゝることもない。何等の因をも内に止めぬからである。瞬間は瞬間を以て終る。今、星にして、次に月たり、今、月にして、次に雲たり、豫知することはできぬ。もし、人ありて、豫知するを得、吾今、月より星に轉ぜんと欲すれば、月より星に轉ずるにあらずや、といふかも知れぬ。しかし、これは決して豫知したのではない。何とならば、今、月より星に轉ぜんと欲するものは何であるか。何故にかく轉ぜんと欲するかと次第次第に尋ね行けば遂に不明となるからである。されば、主體の方向は恰も偶然であるやうで

ある。しかし偶然といふことはできぬ。何とならば偶然とは因果の法則によつて説明できぬものをいふのであるが主體の方向は因果を絶して居るからである。因果を超越するが故に偶然といふべきにあらずしてむしろ自由といふべきである。この自由の中には因果を含むのである。因果と矛盾するものではない。因果の作用はこの主體によつて始めて可能なのである。それ故この主體は一切事物に共通に附着して居る、そのものから離して考へることのできるやうなものではない。空間的に客觀から離して身體の中に求めることのできるやうなものではない。

かくの如く、實在が瞬間的であるといふやうなことをいふと、それは感覺主義であるといふ人があるかも知れぬ。いかにも感覺は幻滅的であつて一瞬一瞬、變り行くものである。しかし、感覺主義は身體の感官によつて身體外の固定的の事物をば知覺するといふのであるから主觀と客觀とは別なものである。感覺主義は摸寫主義である。內外の間に劃然たる境界を立て得ると考ふるものである。しかし、かゝる考が成立すべからざることはカントによつてすでに説破されて居る。しかし、又カントも一方よりいへば感覺主義を交へるといはねばならぬ。何とならば彼は感覺主義の所謂、外界の實在を否定しながら現象界の內容を實在に求めた。而して現象

界とは、時空の形式を通じて主觀の中に映じ來れる實在に外ならぬからである。カントは要するに感覺主義を批判して主觀に映じたる世界、卽ち內界に世界を限定し、實在界は不可知であるとしたるに過ぎぬ。それ故、感覺主義を全然脫して居ることはできぬ。隨つて、カントは主觀と客觀とを純粹に一にすることはできずして、依然として二元論に止まらざるを得なかつた。主觀には感受の形式があるのみで內容は外から得るものとなるのである。この意味に於てヒューム等の白紙論に近い經驗主義である。唯、主觀が時空の形式を有し第一に經驗が統一せられるといふ點に於て英國の經驗主義より進步したものである。しかし、カントは事物を經驗する際にこれは現象界、これは物自體と嚴密に區別することがいかにして可能であつたか。例へば眼を以て月を見るといふ場合にいかにして月と眼とを分離することができたか。眼なくして月ありといふことがいかにして可能であるか。カントはすでにこの兩者は離すべからざるものであるとしたが故に可能なる世界を現象界に限つたのである。カントはこの現象界を主觀と客觀といふ固定した二つの實在が相接觸して、その兩者何れにもあらざる中間のところに於て成生する一つの假の世界と見るのであるから眞の主觀と眞の客觀とが現象界以外に存在せねばならぬことな

るのである。しかし、これはカントが主觀と客觀が全く異れるものであるとするが故に陷る困難である。吾々が月を見るといふことに於ては見らるゝ月と見る主觀とは何等分離することのできぬものである。月に於ては主客は合一されて居るのである。しかし、かくいへばとて主客がまづあつてそれが合一せられるのではない。さきにのべし如く月が實在であつて主客はかりに分つたに過ぎぬ。主客を先行的のものとするが故にカントは眞の實在を誤つて現象界としたのである。現象界が眞の實在である。カントのいふ如き物自體及び主觀界は現象界の分析によつて生じたもので實在の稀薄なものといはねばならぬ。即ち、物自體とは、いはゞ見ざれども依然存在する月といふものにて主觀とは月なくとも依然として存在する眼といふ如きものにて全く抽象的空想にすぎぬ。

かくて、實在は一である。主客は全然その中に渾然たる融合をなして居る。吾々はカントの現象界のみを取て他を放擲して然るべきである。吾々の見聞する世界を別にして他の實在はない。宗教的生活とは主客合一の生活である。主觀と客觀とが全く分離せぬ生活である。絕對自由なる主觀の創造としての生活である。全く全體的の生活である。それ以外に何もない生活である。即ち、自己の內に對象あ

り、對象の內に自己のある生活である。刹那的、幻滅的生活である。過去及未來のなき全く現在的の生活である。宗教的生活には未來はない、又過去もない。全く空想なき生活である。こゝにいふ空想とは現在以外のものである。主客合一の世界以外のものである。即ち實在以外のものである。月が實在である場合には他のものは實在ではなくして空想である。空想とは實在ならざるものである。しかし、空想が空想として主觀の對象となつた時にはそれは又實在である。例へば、月のみが實在である場合に世界には月のみでなくして、他に星もあれば山もあり、川もあると考へた時には、星とか山や川は空想である。何どならば、すでに月といふものに於て主客が合一して居る場合には月以外に何ものもないからである。即ち、吾々の眞主觀が月に向つて居る時には星とか山とか川とかいふものは事實上存在しない。存在することは不可能である。それを想像することも不可能である。それを想像したときにはすでに月は實在でない。即ち、眞主觀は星、山、川といふものに向けられて居るからである。實在は同時に二つ存在することはできぬ。具體的なるものは常に唯一である。それ故、空想といふものは本來なきものである。只かりに名けて空想といふまでゞある。されば、宗教的生活には空想はない。實在のみである。しかし、

宗教的生活といふ特殊のものがあるのではない。何人も皆、日常生活は宗教的生活なのである。唯、彼等は純粹の實在を意識せぬが故に宗教的生活に入ることができぬまでゝある。見聞覺知の一切悉く實在である。一言にしていへば眞主觀の生活が宗教的生活である。しかし、さきにもいつた如くこの眞主觀は無內容なる空虛なるものではない。客觀と常に合一して居るものである。これを無といふも誤りである。又、之を有といふも誤りである。かりに有の方面を取つて之を實相と名づけ無の方面を取つて神といふのである。無は作用の方面ともいふことができる。實在は幻滅的のものである。しかし、この作用の方面は一切の實在中に存在するものである。例へば、今月が實在である場合には月に於て主客は合一して居る。しかし、月なる實在は星といふ實在の場合には空想である。されど星の實在の場合に於て主客は矢張り合一されて居るのであるから、主觀は星といふ實在中に存在して居る。今かりに主觀を意識作用と見て、いかなる存在の中にも存在する一定不變のものと見て、幻滅する實在そのものを空想の形になほして主觀の中に存在するものとして見たる時、その空想は意識內容となり、それが雜多といふことになり、常識的、經驗的世界を構成するのである。而して、一定不變の意識は統一者となり、一者となるのであ

る。空間はこの雜多の方面の背景となる主觀であり、時間はその主觀のはたらいて來た方向である。卽ち、實在を同時的に見る時、もしくは、空想化して見る時の主觀が時間である。それ故靜止して居るのである。しかし、時間は主觀の作用を連續的と見ることより生ずるもの、卽ち、實在からいふと過去もなく、未來もなく、現在のみである主觀を、過去より連續して來て未來に進む一つの方向と見る時に主觀は連續的と見らるゝのであるからこれを時間といふのである。通常絕對時間と考へられるものはこれである。時間の無內容といふことは、客觀からかりに離して考へられたる主觀が、無內容で空虛なものであるといふことに起因し、又、時間の非逆行性は主觀の非逆行性によるものである。しかし、時間はベルグソンのいふ如く實在ではない。眞の主觀ではない。眞の主觀は過去もなく、未來もなき現在である、刹那である。過去の何ものをもその中に止めない。ベルグソンの所謂純粹持續はいかにして過去を含むことができるか。少しの過去もその中に含むことはできぬ筈である。その中に過去を含むことになればそれは眞の主觀ではない。ベルグソンは實在は持續であるといふが、眞の主觀は現在以外に過去もなく未來もないのであるから持續といふものではない。持續と見るのは、それは主觀といふものを抽象し來つたもので

あつて吾人の直接經驗からはすでに一歩退いたものである。かゝるものを實在と見る故に實在を時間と考へるのである。けれども實在は決して時間ではない、持續ではない。過去を含んで居るといふことは、主觀、即ち時間が經驗した意識內容を時間が持つて居るといふまでゞある。かゝる時間はすでに抽象された時間であつて、眞の具體的の實在たる現在そのものから分析によつて得て來たものにすぎぬ。又、空間は時間の橫斷面ではなくして雜多の背景となる主觀である。主觀の內容、即ち意識內容をば現在の同時存在の形に排列したるときの主觀である。その時の內容、即ち雜多は實在にあらずして空想である。この場合の空間が絕體空間である。これは主觀の現在性に起因するものである。實在に於ける客觀方面に於いてはむしろ相對空間である。しかしこれは空間ではなくして主觀そのものである。絕對空間はこの主觀から抽象的に成立するものであつて絕對空間があつて初めて相對空間が成立するのではない。却つてその反對である。而して空間が全宇宙に擴がつて居るといふことは實在の主觀が全實在に遍在して居るといふことに外ならぬのである。實在はこの主觀を離れることができぬといふことが、空間と現象とが密接不離であつて、空間なしには現象界が成立せぬと考へらるゝ所以である。空間が現

象の形式であると考へらるゝのは、カントのいふ如き現象が却つて實在であるから實在と主觀とが離れることができぬものであるといふ事實に基くものである。それ故、時間も空間も主觀に基くものである。この時間の內容となつた空想は歷史の世界であり空間の內容となつた空想は自然界である。何れも皆、實在界にその源を有するものであるが故に、その空想は時間の內容ともなり、空間の內容ともなるのである。この絕對時間、空間の內容は全く空想である。しかし、この空想が空想として主觀の對象となつたときは、それは對象として實在である。この場合が反省である。反省とは空想であるものに主觀が向けられてその空想が新たなる實在となる場合である。それ故、反省は實在の現在性を妨げるものではない。即ち、反省も眞主觀の作用であつて、決して過去に還ることではない。